

陶芸の過去と現在 美術工芸とクラフト

株式会社 テラダプランニング 寺田 泰典



1984 年、そごうに入社し食器売場に配属され、半年後美術工芸品売場に配属されました。翌年上司の推薦で佐賀県立有田窯業大学校に入学しました。そこで勉強した後そごうに戻りました。そして美術陶芸売場を 15 年経験しました。その後本社にて食器のバイヤーとして 3 年間働きましたが陶芸作家を中心とした工芸作家の個展、グループ展の百貨店での企画の仕事をやったかったので 2016 年早期退職し 2 か月後現在の会社を設立しました。現在はそごう、西武、高島屋と取引をしてさまざまな若手作家の個展、グループ展を行っています。

(1) 陶芸の過去

★ 陶磁器の歴史 手から始まったうつわ

(中国、朝鮮、ヨーロッパから日本へ)

古代の人々が両手で水をすくう形から器の原型ができました。中国は 9000 年前、韓国は 7000 年前から、日本は 3000 年前から本格的に陶器の創作が始まったと言われています。

縄文式土器が最初につくられましたが縄文時代は狩猟社会なので力強い形状でした。**弥生式土器**時代は農耕社会なので文化も穏やかになり優しい形状になりました。5 世紀、**須恵器**は朝鮮半島から伝わってきた器です。それは窖窯(あながま)でつくられたものなので器に木の灰がついて模様になったり、灰の色で青灰色になったりしたものです。それに影響を受け日本人は窯による制作を始めます。

7 世紀、遣唐使時代、飛鳥時代、中国との貿易が盛んになり、**唐三彩**(唐代の鉛釉を施した陶器)が伝わってきます。中国の唐に技術を学んで奈良時代の日本でも**奈良三彩**が作られます。

8 世紀、奈良時代、愛知県尾張、現在の豊田市に**猿投窯**(さなげがま)が始まり、それは近畿、東北、九州と流れ、日本各地に広まり、200 余の産地が生まれたと言われています。

★ 日本が独自に育んだやきもの

日本六古窯(ろくこよう)は古来の陶磁器窯のうち、中世から現在まで生産が続く代表的な産地で愛知県瀬戸焼、常滑(とこなめ)焼、福井県越前焼、滋賀県信楽焼、兵庫県丹波焼、岡山県備前焼です。昭和 30 年陶芸作家小山富士夫氏が日本六古窯と命名しました。

★ 磁器生産の始まり

①陶器から磁器へ

16 世紀(豊臣秀吉の時代)が焼き物の全盛期と言われています。豊臣秀吉は茶の開祖と言われる千利休(茶人)に惚れ、重用したことで茶道具、茶の湯(焼き物)が発展しました。

そこで使われる茶碗 いろんな焼き物が出てきました。茶の湯で重用されるのが京都の**楽焼**、二番目は山口県の**萩焼**、三番目は佐賀県の**唐津焼**、他、岐阜県の**織部焼**、**志野焼**などが出てきます。

★日本磁器誕生

(写真：九州陶磁文化館所蔵)



有田町 泉山磁石場

一方、一般的に使われる食器で磁器が出てきます。中国 7 世紀～14 世紀、朝鮮 15 世紀、日本 1610 年代、朝鮮より招致した陶工で李参平が佐賀県唐津、岸岳に構えたのが有田焼のはじまりです。有田の泉山に磁器のもとになる鉱脈があったのを李参平が探し当てたのが磁器生産の始まりです。

昔は山でしたが磁器の採石場にした場所です。今では硫黄分が含まれているので、茶色がかっています。

日本の磁器はヨーロッパへも影響を与えています。

外国との比較(磁器生産始まり)

- ① 中国 7C・14C～
- ② 朝鮮 15C～
- ③ 日本有田 1610 年代～
- ④ ドイツマイセン窯 1709 年～
- ⑤ オーストリア ウィーン窯 1719 年～

★ 有田磁器の技術の源流と変化

磁器の基本



朝鮮の技術 1610~30 年代

型打技法



中国の技術 1630~40 年代
初期の伊万里焼

色絵技法



中国の技術 1640~50 年代
中期の伊万里焼

様式の完成



日本の技術 1700~40 年代
後期の伊万里焼

絵具、成形法等の革新



ヨーロッパの技術
1870~1900 年代 (近代)

❀朝鮮、中国、ヨーロッパの技術の影響を受けて、最初の単純な型から色をつけ、いろんな模様を入れ、さらに工夫をして日本独自のものを造りだしました。海外からもおおきな注目を浴びています❀

★ 伊万里焼（古伊万里）＝江戸時代の有田焼 17～19 世紀

★ 輸出時代の到来 (写真：九州陶磁文化館所蔵)

日本からインド洋を通してヨーロッパへ船で運ばれました。すごい日数をかけて運ばれた有田焼。出来上がった焼き物が壊れないように、最後に陶器を梱包する仕事の人がいちばん賃金が高かったそうです。

■ 江戸時代に作られた有田焼を古伊万里と言います。そして伊万里焼も唐津焼も有田焼です。佐賀県の伊万里港から船で出され、大阪に渡ったものを伊万里焼と言われました。唐津港から出されたものが唐津焼と言われたのです。明治 30 年からは鉄道によって運ばれるようになったので、有田焼と普通に呼ばれるようになりました。



1655～1670 年代

芙蓉の花が開いたようなデザインの皿は輸出品のなかでも人気の商品でした。



1670～1690 年代

ヨーロッパの貴族に好評。乳白色の素地に華やかな色彩で絵画的な文様を描いた柿右衛門様式の皿。



1700～1740 年代

ヨーロッパの貴族に好評でしたが現在はつくられていません。60cm～1 mの大きさで当時蓋付きは価値があるものとして輸出されました。藍地に金と赤を主体とした彩色のものを古伊万里金欄手様式といいます。

★ 鍋島焼の登場

(写真：九州陶磁文化館所蔵)

5代将軍徳川綱吉の時代、佐賀県の鍋島藩は有田の窯に御用窯を作らせました。将軍家や諸大名への献上品として作られたのが鍋島焼です。やがて、有田焼を制作する窯が増え、原料が枯渇してきて、窯の数を 16 に減らしました。



5代将軍 徳川綱吉 1680~1709 年在位



鍋島焼 1690~1730 年代 MOA 美術館蔵

桃の花が特徴



8代将軍 徳川吉宗 1716~1745 在位



鍋島焼 1700~1730 年代 静嘉堂文庫美術館蔵

水中花が特徴

★天皇の食器は有田で製作



仁孝天皇 1817~1846 年在位 泉涌寺蔵



菊の御紋入り。九州陶磁文化館所蔵

★庶民へ

(写真：九州陶磁文化館所蔵)

18世紀、上流階級にしか手にすることができなかった有田焼は19世紀には日用雑器にまで行き渡るようになりました。



温かいご飯をどうぞ（蓋付き）

お目出たい赤丸紋



庶民の味方そば猪口登場

平たい底と直線的な立ち上がりにより特徴

『江戸流行料理通大全』 第参篇
文政九年（一八二六）
東京家政学院大学附属図書館



江戸時代 19 世紀前半料理に有田焼が使われています。猪口洗も登場しました。



★18 世紀後半



鯉は滝を登って龍になる謂れにより、登龍門の図は縁起の良いものとして好まれました。

大皿 囲んで大宴会

★19 世紀後半 輸出の再開



外国人が喜ぶような日本趣味を強調した輸出品。

★ 陶器と磁器の違い

■ 陶器（萩焼、備前焼、越前焼、笠間焼、益子焼など）

素材—粘土土、透光性なし、表面に貫入(ヒビ)があるので吸水性がある。指で弾くと乾いた音。

○ 陶器を始めて使う前にする必要なこと

1、鍋に器を入れ米のとぎ汁を器が浸るくらい入れて 10 分間くらい煮る。

- 2、器を洗って十分に乾かす。そうすると水がしみ込みにくくなり、末永く楽しみ、器が独特な味わいを出します。

■磁器（有田焼、九谷焼）

素材一石、透光性あり、表面は滑らかで、指で弾くと金属音がする。

○ 磁器の粘土ができるまで

- 1、磁石をスタンパー（石づちのようなもの）で叩き、砕く。
- 2、粉碎したものをボールミルという機械に玉石と一緒に入れて、ミクロンの粒になるまで回転させて混ぜる。
- 3、水槽に入れしばらく置き分離させる。
- 4、比重の重い下にたまったものを乾かす。
- 5、磁器の粘土土ができる。

○ 釉薬（ゆうやく）ーガラスでできている。出来あがった陶磁器を保護するために焼き付けるもの

- 1、普通は透明。
- 2、呈色顔料の鉄を釉薬に混ぜると酸化して色は、鉄の少ない順に薄緑→緑→黄色→茶色→黒となる。
- 3、呈色顔料の銅を釉薬に混ぜると酸化焼成の場合、緑色（織部など）になる。
還元焼成（酸欠）の場合、赤色（辰砂）になる。

(2) 成形技法

- 1、手びねり（手づくね）ー粘土を手で形作ったり紐状にして巻いて積み重ねて作ります。
- 2、たたらいー粘土を四角に作り、ワイヤーで引いて、薄い板を作ります。
- 3、ろくろー昔は木でできていたが今は金属でできています。ろくろを回しながら、作ります。
- 4、鑄（い）込みー石膏で型を作り、液状粘土を入れ込んで作ります。
- 5、機械ろくろー石膏製の外型と内ベラで成形。量産向上。
- 6、ローラーマシンーマシンの上下が反対向きに回り、その中に粘土を入れると一瞬で成形ができます。
- 7、圧力鑄込みー変形したもの、長方形、楕円形を作るもの。同じ型をいくつも作り、圧力をかけた粘土を流し込み作ります。量産向上。

(3) 加飾技法

- 1、絵付け（下絵付け）ー釉薬をかける前に絵柄を施すこと。
（上絵付け）ー釉薬をかけて焼成した陶磁器の表面に絵柄を施すこと。
- 2、彫り（陽刻）ー絵が浮き上がるように彫ること。
（陰刻）ー絵をくぼませて彫ること。
- 3、いっちんーチューブ型の筒に粘土を入れて絞り出しながら、模様を描くこと。
- 4、粉引き（こひき）ー茶色の成形器に白い土液を流したり、筆で白く塗ること。
- 5、透かし彫りー成形後しばらく置いてから、素地が生乾きの状態でカッターなどを使って彫ること。くり貫き模様から光が入り、美しい。
- 6、貼花（ちょうか）ー焼き物に別のものをくっつけること。花、動物など。

(4) 近代陶芸の巨匠

■ 明治～大正期

板谷波山（いたやはざん）：

茨城県出身、文化勲章受章、波山の名前は筑波山の波山からとったそうです。

装飾性が高い作品、釉薬によって白磁にマット釉で優しさを表現。自己に厳しい作家。

富本憲吉：奈良県生駒市出身。東京美術学校図案科卒業後、イギリスに留学し建築を勉強。その後陶芸家となる。自由に形を追求し、色彩鮮やかな作品などを作りました。

■大正～昭和期

濱田庄司：神奈川県川崎市出身。益子焼代表作家。人間国宝。板谷波山に師事。民芸運動に参加。シンプルな造形を釉薬の流描による大胆な模様を得意としました。

楠部彌弌：京都出身。文化勲章作家。自然から学ぶ姿勢で作陶。白磁の上に呈色剤を混ぜた採泥を用いた「彩涎(さいえん)」という技法を見出した。古来のさまざまな技法や作風を再現する技術を持っていた。

加藤唐九郎：愛知県出身。県の文化功労者。瀬戸、美濃、唐津、丹波の古窯跡を研究し、古いものの良さを表現しました。

(5) 現代の陶芸 美術陶芸とクラフト (写真：今右衛門陶舗社長今泉善雄氏提供)



今右衛門家の工房、以前は2階が工房として使用（佐賀有田）

今泉今右衛門家は江戸期鍋島藩の御用赤絵師として色鍋島の技術、品格、格調を継続しました。

昭和10年頃までこの工房が赤絵師の仕事をしていたので筆を洗い流し屋根は赤く染まっています

現在の工房は向かいにあります。

(6) 現在の美術・クラフト作家

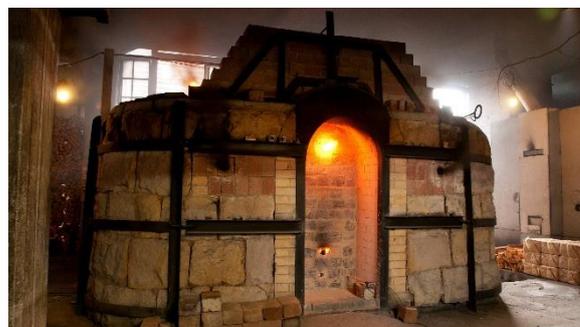
(美術陶芸 - 主に鑑賞を目的 クラフト陶芸 - 主に使うことを目的)

★ 美術陶芸：14代今右衛門（いまえもん） (写真：今右衛門陶舗社長今泉善雄氏提供)

昭和37年生まれ。平成26年人間国宝。



・美術陶芸を代表する14代今右衛門氏



現在の今右衛門窯の窯場

★ 墨はじき技法



色絵雪花藍色墨はじき四季花文花瓶

江戸期から鍋島焼でよく使われた白抜きの技法です。まず墨で模様を描き、その上に絵具を吹き付けます。すると墨に入っている膠分が撥水材の役目をし、墨で描いた部分が染付の絵具をはじきます。その後、素焼きの窯で焼くと墨が焼き飛び、白抜きの文様が現れます。染織のろうけつとよく似た技法です。主文様を引き立たせるための脇役の表現方法です。墨はじきによって描かれた個所は染付の

色絵薄墨墨はじき果実草花文蓋付瓶

線描きされた個所と比べるとやさしい控えめな印象を与えます。今右衛門氏はその特性を最大限に生かすために、

この墨はじきが主文様の背景に使われることが多い。



色絵薄墨墨はじき雪文鉢



色絵吹墨墨はじき雪文翡翠香炉

★美術陶芸： 上瀧勝治（うわたき かつじ）

佐賀県有田町出身。奥川忠右衛門に師事。千葉県佐倉市に築窯し独立。田村耕一に師事。
葆光布染彩磁の研究を始める。以後、伝統工芸展入選、奨励賞、優秀賞多々。

★布染彩磁器（写真無し）

白い磁器に肌には浮き上がる花々や幾何学模様。美しい色どりと、ふわりとした濃淡が作品に奥行きを生み、見るものをやさしく包み込みます。

布染とは布を使って素地に絵付けをする技法で、普通下絵付けは、筆などで輪郭を引いたり色を使って文様を描くが布染めはまず布（不織布）に花びらや葉などの形を描き、一枚ずつ切り取って布の形を作ります。それを素焼きした素地に載せ、筆で顔料を染み込ませて文様を転写していきます。これに磁器に彩色する彩磁を組み合わせたのが布染彩磁で、金赤技法である「正臙脂（しょうえんじ）」絵具を用い優しい色表現をしています。

★クラフト陶芸： のぐちみか（加飾）

京都造形芸術大学陶芸コース卒。多摩美術大学大学院陶専攻修了。調布市に工房を構える。

★いっちゃん

(写真のぐちみか氏提供)



鉛筆で下書き



半分乾いたぐらいの時にチューブに入れた白い粘土液を流しながら描きます。

★蛍手



素地を棒やカッターで穴をあけ、透かし彫りをした作品に透明釉をかけて焼き上げます。

★クラフト陶芸：多田佳豫（ただ かしょう）（釉彩）

多摩美術大学日本画卒業。パリ国立美術学校油絵科卒。パリを拠点に現代美術作家として活動していましたが、東日本大震災後日本に帰り、陶芸の道に入っていました。

釉薬の可能性を追求し、様々な色彩で作品を制作、とりわけ柔らかなピンクの色を得意としています。

(7) 今後の陶芸について

- 1、美術—伝統的な陶芸については日本人が昔から好んでいる細密な絵、加飾作品また現代美術寄りの形を追求する作家、ダイナミックな立体造形をする作家が台頭するでしょう。
- 2、クラフト—釉薬の作家がかなり注目を浴びつつあり、また食器以外の小

【質疑応答】

- Q：この資料に載っている歴史のところでは中国は5000年まで、日本は3000年前と言われましたがこれは違うんじゃないかと思うんですが。
- A：確かに初めて粘土が焼かれたのは15000年位前となります。その時代は野焼きというごくシンプルなモノでした
- Q：縄文土器は実用的とは思えないけども、どうしてあのような複雑な模様をしているのでしょうか。
- A：祭祀に使う道具として、埋葬品としても作られていた可能性が高いです。
- Q：中国の景德鎮が古伊万里に与えた影響をおしえてください。
- A：景德鎮は陶磁器のふるさとと言われています。奈良時代に中国の文化が入ってきました。景德鎮の白磁が入ってきたのです。が、磁器を作るまでかなりの年数があります。700年位経って朝鮮の陶工を連れてきて磁器を焼くようになりました。島国なので文化の流通にも長くかかり、またそれまでは白磁に価値をおかなかつたのではないかと、色絵が出てきてから磁器に対する関心がでてきたのではないのでしょうか。
- Q：古伊万里の古い時代、青一色だった時代にヨーロッパ貴族にもはやされたのはなぜでしょうか。
- A：古伊万里の青はあまりヨーロッパには輸出されていないと思うんですが1610年以降、外国との交流がだんだん増えてきました。そこで日本の紹介をされています。日本の文化が海外にも紹介され、興味を持った人が古伊万里のコレクターとして持っていたのではないのでしょうか。

寺田泰典（てらだ やすのり）講師のプロフィール

（株）テラダプランニング 代表

【略歴】

1961年：誕生

1984年：（株）柏そごう入社

食器売り場に配属、半年後に美術工芸品売場へ異動

1985年：社命により佐賀県立有田窯業大学校へ留学

1987年：卒業後、美術工芸品売場へ再配属 陶芸担当

2009年：そごう・西武・商品部 食器バイヤー

そごう横浜店、そごう千葉店を経てそごう大宮店へ

2016年：早期退職し、2か月後に現在の会社を設立

そごう・西武、高島屋にて若手を中心に陶芸作家、
ガラス作家の個展、グループ展、企画展多数開催
現在に至る